巫女さんと少年の出会い

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
巫女さんと少年の出会い

【Ｎコード】
Ｎ８７７５Ｅ

【作者名】
ユーリ

【あらすじ】
『ハヤテのごとく！』の読み切り版の理沙バージョン小説。クリスマスの夜神社で出会ったハヤテと理沙。やがて２人は少しずつ惹かれ合っていく・・・

（前書き）

このお話は、『ハヤテのごとく！』が連載になる前の読み切りを朝風理沙バージョンにアレンジした話です。
とはいえ、展開が途中からかなりちがうと思います。
楽しんでいただければ幸いですので、どうぞよろしくお願いします。
それでは、本編へどうぞ～・・・

―12月24日―

世の中が、クリスマスとやらに浮かれている頃・・・

約8ケタを超える借金を残し、少年、綾崎ハヤテの両親はいなくなった。

―□□□□□□借用書□□□□□□―
―□□□¥1476286 50□□□―
―□□ハヤテ！！後は頼んだ！！□□―
―□□□□□パパ★ママ♪□□□□□―

綾崎ハヤテ

「（・・・どどど・・・どうしよう・・・大体・・・こんな借金頼まれてもボクには・・・）」

放心状態のハヤテ。

そこへ・・・

「おい！！」

ザッ！

ハヤテ

「！！」

「兄ちゃん・・・この家の関係者か？」

ソリに乗ったサンタの代わりに、ポルシェに乗ったヤクザが来た。

ハヤテ

「ぬあああああああ！！」

ダッ！

ハヤテは全速力で逃げ出した。

「あっ！！このガキ！！待ちやがれ！！」

「チッ！！何て逃げ足の速さだ！！」

「おい！車出せ！！車！！！」

「クソッ！どこ行きやがった！！」

「探せ！探せ！！」

「各臓器を売っ払うだけだ！！サッサと出て来いやゴルァ！！」

ハヤテ

「（う・・・売られてしまう・・・）」

１６歳のクリスマスイブ・・・

少年は1人だった。

ハヤテはとある神社まで逃げてきた。

ハヤテ
「ハ～、お腹が空きましたね～。かといって電話もないし・・・元より頼れる親戚や友人もいないですしね～・・・（家がないとはいえ、こんな所で寝たら凍死するし・・・困ったな～、このままじゃ餓死か凍死で・・・）」

翌日の朝刊に記事が載るのは確実である。

ハヤテ
「・・・イヤイヤ、ポジティブシンキング！！とにかく仕事があれば良いんですよ、仕事が！！そのためになけなしのお金で買った履歴書！！とにかくこれをキチンと書いて・・・何とかバイトを！！バイトを・・・」

その時ハヤテは気づいた。

自分には住所と電話番号がない事を。

ハヤテ
「（住所と電話番号がないと・・・マトモな履歴書にならないなぁ・・・）」

それではバイトができません。

ハヤテ
「（あの不幸なネロでさえ、死ぬ時にはパトラッシュがいたというのに・・・）」

その時、彼にある考えが浮かんだ。

ハヤテ
「（こうなったらここ神社ですし、賽銭泥棒とかしてみましょうか！？もし失敗しても・・・刑務所で食事と寝床にはありつけますし！！）」

神をも恐れない犯行と言えるかも知れない。

ハヤテ
「（幸い誰もいないようですし、今の内に賽銭を・・・）」

その時、ハヤテの後ろから声がした。

「君、こんな所で何やってるんだ？」

ハヤテ
「え！？」

ハヤテが恐る恐る振り向くと、巫女服を着たハヤテと同年代と見られる少女がこちらを見ていた。

「クリスマスの夜にお参りとも思えないし・・・まさかとは思うけど、ウチの賽銭を・・・」

ハヤテは後退りした。

ハヤテ
「（迂闊だった・・・まさか神社の人がいたとは・・・このままではボクの犯行計画がバレてしまう・・・でも幸いこの人ボクと同年代のようだし、見た目か弱そうだし・・・ここはおとなしくしてもらうか？）」

そんな事を考えていると、ハヤテの頭に雪が降ってきた。

ドサドサッ！！

ハヤテは雪に押しつぶされた。

「キャッ！？」

ハヤテ
「あ・・・うっ・・・ゲフッ。」

ハヤテは気絶した。

「ちょっと、君！大丈夫か！？」

少女はハヤテに話しかける。

それからしばらく、ハヤテの記憶が飛んだ。

ハヤテ
「・・・あれ？・・・ここは・・・？」

ハヤテは目を覚ますと、辺りを見回した。

ハヤテ
「何か、ヌイグルミがたくさんあるなぁ・・・もしかして・・・天国？」

ハヤテは呟いた。

「ちがうよ。」

ハヤテ
「え？」

ハヤテが振り返ると、さっきの少女が笑いながらドアを開け入って来た。

「あの時は本当に死んじゃったのかと思ったけど。」

そう言って、少女はドアを閉めた。

朝風理沙
「初めまして、朝風理沙と言います。」

ハヤテ
「あ、どうも、綾崎 ハヤテと言います。」

ハヤテは軽く挨拶した。

理沙
「ハヤテ君、急に雪に埋もれて動かなくなったから、家の中に運んだんだよ。」

ハヤテ
「あなたがですか？」

理沙
「イヤ、私の兄だよ。私には男の子を運ぶ力がないし、父は体力ないから。」

ハヤテ
「そうだったんですか・・・ありがとうございます！」

ハヤテは深々とお辞儀をした。

理沙
「いえいえ。ところで、少々聞きたい事があるんだが・・・その・・・さっきの事について・・・」

ピクッ！

ハヤテ
「（もしかして・・・バ・・・バレてる！？）」

賽銭泥棒賽銭泥棒賽銭泥棒賽銭泥棒賽銭泥棒・・・

理沙
「さっき、ウチの賽銭箱に近づいていた事について・・・」

ハヤテ
「スイマセン！スイマセン！！賽銭泥棒なんて、もう2度と・・・！！」

理沙
「（・・・）え？・・・賽銭泥棒？」

ハヤテ
「・・・！！」

自白・・・

隠していた事を自分から打ち明ける事。

自爆・・・

今の少年のような状況。

ハヤテ・理沙
「・・・」

理沙
「ええっと・・・少し話を聞かせてもらえるか？」

ハヤテ
「は・・・はい・・・」

その後、少年の弁明は３０分以上続いたという・・・

理沙
「・・・フム。おおむねハヤテ君の事情は理解した。」

ハヤテ
「その・・・さっきの事は謝りますから、もう許して欲しいって言うか・・・」

理沙
「まぁ・・・さっきの事も未遂なワケだし・・・ところで、クリスマスの夜にあんな格好でいたって事は、それなりの理由があるんだよね？何であんな格好でウチの神社にいたの？」

ハヤテ
「えっと・・・それについてはコレを・・・」

ハヤテは1通の封筒を理沙に渡した。

理沙
「何々・・・借用書・・・１４７６２８６５０円・・・これ、もしかして君の親の借金？」

理沙は唖然としながらハヤテに聞いた。

ハヤテ
「ええ・・・恥ずかしながら・・・おかげで家はなくなるし、ヤクザに臓器狙われるし・・・もう散々でしたよ・・・」

理沙
「ハァ・・・それは大変だったな・・・ところで、君、これを返す方法のあてはあるのか？」

ハヤテ
「いえ・・・ありませんが・・・」

理沙
「そうか。それなら・・・私の家で仕事をするか？」

ハヤテ
「え？朝風さんの家で？」

理沙
「ああ。ウチは神社だから、お祓いの手伝いとか私の警護とかそんなのになると思うけど・・・良いかな？」

ハヤテ
「ええ・・・それでかまいませんよ。これからよろしくお願いします、朝風さ・・・」

理沙
「理沙で良い。」

ハヤテ
「え？」

理沙
「今日から私の家で暮らすんだ、私の事は理沙で良いよ、ハヤテ君。

」

ハヤテ
「はい！わかりました、理沙さん。」

こうして、ハヤテは理沙の家で暮らす事になった。

翌日

理沙
「ん・・・ん～・・・」

理沙は目を覚ました。

理沙
「ふぁぁ・・・」

理沙が目をこすりながら降りて来ると、ハヤテが朝食を作っていた。

ハヤテ
「あ、理沙さんおはよおうございます。」

理沙
「おはよう。朝ゴハンを作ってくれてるのか、ハヤテ君？」

ハヤテ

「ええ、理沙さんにお世話になっているんですから、これくらいしないと。」

ハヤテは笑顔で言う。

理沙
「その年で男の子が料理できるとは感心だな。誰かに習ったのか？」

ハヤテ
「ほぼ独学です。親があんなのでしたから、バイト暮らしの毎日でしたし。」

ハヤテは少し暗い顔で言った。

理沙
「あ、ゴメン・・・・」

理沙はハヤテに謝った。

ハヤテ
「謝らなくて良いんですよ。悪いのはあのグータラな親なんですから。」

理沙
「ハ、ハァ・・・」

ハヤテ
「家族の方達を呼んで来てください。朝食にしましょう。」

理沙

「わかった。」

理沙は親達を呼びに行った。

ハヤテ達は食卓を囲んで、朝食を食べていた。

「うまい！！こんなうまいゴハン今まで食べた事ないぞい！！」

理沙の祖父は、ハヤテの作った朝食に舌鼓（シタツヅミ）を打った。

「本当だな。母さんや理沙が作る料理と同等のおいしさだ！」

理沙の兄も同意する。

ハヤテ

「独学で覚えましたから。」

理沙

「本当にスゴイよ、ハヤテ君。」

「ねぇ、ハヤテ君。いっその事リッちゃんのお嫁さんになっちゃえば？」

理沙の母が思いがけない事を言った。

理沙

「母さん、何を言うの！！だいたいハヤテ君は男の子だよ！！」

「だぁ～って、あなた見た目男の子みたいだし、ハヤテ君見た目女の子みたいじゃない？」

ハヤテ・理沙
「・・・」

ハヤテと理沙は顔が赤くなった。

理沙
「じゃ、じゃあ私、学校行って来るから・・・ハヤテ君、神社の掃除しておいてね・・・」

理沙はそう言うと、カバンをひっつかんで出て行った。

「リッちゃん、顔赤くしちゃって～！」

「青春じゃのぅ・・・」

ハヤテが神社の庭を掃除していると、２人の男達がハヤテを見ていた。

ハヤテ
「（何でしょう、あの人達・・・）」

ハヤテは不審に思いながら、庭掃除を続けた。

ハヤテは理沙の祖父と昼食を食べていた。
もちろん昼食はハヤテが作ったものだ。
「何？怪しい２人組を見かけた？」
ハヤテ
「ええ、別に何もしなかったので、気にせず掃除してましたが。おじいさん、何か心当たりがあるんですか？」
ハヤテが聞くと、祖父は顔をしかめながら言った。
「イヤな、最近よくウチの神社に来る客達なんじゃが、どうも妙な感じがするんじゃな。まるで、何かよからぬ事を企んでいるような・・・」
ハヤテ
「ハァ・・・」
「ま、ワシの思い過ごしと思うがな。」
ハヤテと祖父は、その人物達の事を特に気にも留めなかった。
後々、その事が大きな間違いだとわかるのだが・・・
ハヤテが夕食の買い出しに行こうと神社の入口に向かうと、ちょうど理沙が学校から帰って来たところだった。

ハヤテ
「あ、理沙さん。」

理沙
「ハヤテ君、今から買い物か？」

ハヤテ
「ええ、夕食の買い出しに。」

理沙
「少し待っててくれ。私も一緒に行くから今から着替えて来る。」

ハヤテ
「わかりました。」

ハヤテは入口の所まで行き、理沙を待った。

数分後、理沙が私服に着替えてやって来た。

理沙
「お待たせ、ハヤテ君。では行こうか？」

ハヤテ
「そうですね、理沙さん。」

ハヤテと理沙は、夕食の買い出しへと向かった。

ハヤテと理沙は、遠くのデパートまで買い物にやって来た。

ハヤテ
「理沙さんは、いつもここで食材を買ってるんですか？」

ハヤテがメモ用紙を見ながら理沙に尋ねる。

理沙
「ああ。ここは割と安値で食材が買えるし、決まった日にはセールやったりしてるからな。」

ハヤテ
「何かバーゲンセールに繰り出す主婦達みたいな感じですね。」

理沙
「ハハッ、そうだな。」

ハヤテの笑顔に理沙も微笑む。

ハヤテ
「イヤァ、それにしても・・・」

ハヤテは一旦言葉を句切ると、理沙の方を見ながら再び口を開きこう言った。

ハヤテ
「巫女服や制服着てる姿も良いですけど、私服の理沙さんもカワイイですよね～♪」

理沙
「ふぇっ！！そ、そうかな・・・」

ハヤテの言葉に、理沙は顔が赤くなった。

ハヤテ
「ええ、とてもカワイイですよ♪」

理沙
「そ、そうか・・・」

理沙はますます顔が赤くなった。

まさにユデダコだ。

ハヤテは微笑むと、理沙と共に買い物を再開した。

食材を買い終えたハヤテと理沙は、食材を袋に詰め込んでいた。

理沙
「これで今日と明日は保つな。」

ハヤテ
「そうですね。ところで理沙さん、他に行きたい所ありますか？」

理沙
「え？」

ハヤテの言葉に理沙はキョトンとする。

理沙
「どういう意味？」

ハヤテ
「理沙さんが他に行きたい所があるなら、ボクもつき合いますよって意味です。」

理沙
「あ、なるほど。」

理沙は納得すると、再び口を開いた。

理沙
「そうだな・・・上の階に服屋があるんだが、前にカワイイ服があったのを思い出してな。その時は所持金が少なくて買えなかったんだが、今は丁度持ち合わせがあるから買えるかなと・・・」

ハヤテ
「なら、一緒に買いに行きましょう。他には？」

理沙
「そうだな・・・同じ階にＵＦＯキャッチャーがあって、どうしても欲しいヌイグルミがあるんだが中々取れなくて・・・」

ハヤテ
「なら、ボクが取ってあげますよ。」

理沙
「え、良いの？」

ハヤテ
「ええ、理沙さんにはお世話になっていますから。」

理沙
「そ、そっか。なら、お願いしようかな・・・」

理沙は赤面しながら言う。

ハヤテ
「じゃあ、行きましょうか。」

ハヤテは理沙の手を握った。

理沙
「あ・・・」

理沙は赤面する。

ハヤテは理沙を引っ張り、2階へと上がって行った。

ハヤテは、右手に買い物袋を持って歩いていた。

理沙
「ありがとう、ハヤテ君。おかげでこんなに服が買えたよ。」

理沙は欲しかった服がたくさん買えて、嬉しそうだ。

ハヤテ

「いえいえ。ところで、欲しいヌイグルミがあるＵＦＯキャッチャーがあるのはどこです？」

理沙
「あそこだよ。」

理沙が指差した方に、大きな機械があった。

ハヤテ
「ああ、確かにありますね。」

ハヤテは理沙と共に機械に近づく。

ハヤテ
「どうです？目当てのヌイグルミはあります？」

理沙
「うん、あったよ！あそこに！」

理沙はヌイグルミを指差す。

ハヤテ
「任せてください。必ず取りますので。」

ハヤテはそう言うと、お金を入れて機械を動かし始めた。

数分後、理沙は嬉しそうに歩いていた。

その手にはさっきのヌイグルミが抱えられている。

ハヤテ
「ね、取れたでしょ？」

理沙
「うん、ありがとうハヤテ君♪」

理沙は満面の笑みでお礼を言った。

理沙
「そろそろ暗くなってきそうだし、帰ろうか。」

ハヤテ
「そうですね。・・・ん？」

ハヤテは後ろを振り返る。

すると、怪しい2人組がハヤテと理沙を監視していた。

理沙
「何だろ、アイツら・・・」

ハヤテ
「今日ボクが神社の庭を掃除していた時にも見かけたヤツらですね。
何だか怪しそうです。」

理沙
「ど、どうしよハヤテ君・・・」

ハヤテ
「走りましょう！！」
そう言うと、ハヤテは理沙の左手を握った。
ギュッ！
理沙
「あっ・・・」
そのまま一気に走り出す。
ダッ！
「！！」
ハッとした2人組は慌てて後を追ったが、デパートの外に出るともうハヤテと理沙の姿はなかった。
「チッ・・・」
2人は舌打ちすると、近くに停めてあったバイクに乗りその場を去った。
ブォォォォォ・・・

ハヤテと理沙は、朝風神社まで走って来た。

ハヤテ
「理沙さん、大丈夫でしたか？」

理沙
「う、うん、大丈夫だよ・・・それにしても、さっきのヤツらは一体何なんだ？」

ハヤテ
「ボク達を監視してたって感じがしますね。晩ゴハンの時におじいさん達に相談してみましょう。」

理沙
「ああ、そうだな。」

ハヤテと理沙は、家の中に入った。

ハヤテと理沙は晩ゴハンの時、祖父達に夕方の事を話していた。

「何？怪しいヤツらに監視されていたじゃと？」

理沙
「ああ。ハヤテ君がいなかったらどうなっていたかわからない。」

「そうか。ハヤテ君、妹を守ってくれてありがとうな。」

ハヤテ

「いえいえ。」

ハヤテ達は談笑しながら、夕食を食べた。

その夜、ハヤテは自分に割り当てられた部屋で寝ていた。

ハヤテ

「昼間おじいさんが言ってた事、気になるな・・・あの2人は、何か目的があって理沙さんを監視していたんだろうか・・・？」

ハヤテが考え事をしていると、扉をノックする音が聞こえた。

コン、コン！

ハヤテ

「はい、誰ですか？」

理沙

「私だ、ハヤテ君。入って良いかな？」

ハヤテ

「理沙さん？」

ハヤテは扉を開けた。

ガチャ！

パジャマ姿の理沙が入って来る。

ハヤテ
「どうしたんですか、理沙さん？」

理沙
「ホラ、夕方怪しい２人組に監視されたろ？あんな事があったから、１人じゃ眠れないんだよ。」

ハヤテ
「何が言いたいんです？」

理沙
「だから！一緒に寝てほしいんだよ！！」

顔を赤くしながら言う理沙に、ハヤテも赤面しながら驚いた。

ハヤテ
「えええええ！！」

理沙
「ダメなのか？」

ハヤテを上目遣いで見つめる理沙。
もはやハヤテに選択の余地はない。

ハヤテ
「わ、わかりましたよ・・・」

ハヤテは観念した。

理沙
「じゃあ、お言葉に甘えて・・・・」
理沙はベッドに潜り込んだ。
理沙
「ハヤテ君・・・・」
ハヤテ
「何です？」
理沙
「夕方は守ってくれてありがとう。正直言うと、あの時私スゴく怖かったんだ・・・・」
そんな理沙に、ハヤテは優しい言葉をかけた。
ハヤテ
「安心してください。これから先あのような輩がいつやって来ても・・・ボクが理沙さんを守りますから。」
ハヤテの笑顔に、理沙は顔が真っ赤になった。
理沙
「う、うん・・・・お願いします・・・・」
理沙はそう言うと、スヤスヤと眠りに落ちた。
理沙

「スー、スー・・・」

ハヤテ
「必ずあなたを守ってみせますよ。カワイイ理沙さん・・・」

ハヤテは隣で眠る理沙に微笑みかけながら、自分も眠りについた。

翌日の朝、理沙はゆっくり目を覚ました。

理沙
「ん～、よく寝た・・・って、え!!」

理沙の隣にはハヤテがいた。

ハヤテはまだスヤスヤ寝ている。

理沙
「な、何でハヤテ君が私の隣で・・・あ!」

理沙は昨日の夜の事を思い出した。

理沙
「そういえば、昨日の夜1人じゃ眠れなくなってハヤテ君の部屋に行ったんだっけ・・・それにしても・・・」

理沙は寝ているハヤテの顔をのぞき込んだ。

理沙

「（寝顔もカワイイなぁ、ハヤテ君・・・キ、キスしちゃっても良いかな・・・？）」

理沙はハヤテに顔を近づけて行く。

理沙
「（もう少し・・・もう少しでハヤテ君と・・・）」

理沙は顔が赤くなる。

彼女の唇がハヤテの唇に触れそうになった、まさにその時だった。

「お～い、ハヤテ君～。」

理沙
「！！」

ハヤテの部屋のドアが開くと同時に、理沙はビクッとなった。

「あれ？理沙？オマエ何でここにいるんだ？」

理沙
「お、お兄ちゃん・・・」

そう、そこにいたのは理沙の兄の朝風理織であった。

理沙
「き、昨日少し眠れなくて、ハヤテ君の部屋に来てたの・・・」

朝風理織（アサカゼ リオ）

「フ～ン。それにしても・・・」

理織は理沙をジ～ッと見つめた。

理沙

「な、何よ！？」

理織

「理沙はハヤテ君に何しようとしてたのかなぁ～？」

理織はニヤニヤしながら言う。

理沙

「べ、別に何だって良いじゃない！！私だって女の子なのよ！！」

理織

「あ、ハヤテ君にキスしようとしてたのか♪朝からお盛んだねぇ～♪」

理沙

「～！！」

理沙は顔を真っ赤にした。

カァァァァァ！！

理沙

「も～、お兄ちゃんのバカバカバカ！！」

理沙は理織の頭をポカポカと叩いた。

ポカポカ！

理織
「イテテ！暴力反対！」

理沙
「何が暴力よ！お兄ちゃんこそ私をイジメてるじゃない！！」

理沙はスゴク怒っていた。

理織
「悪い悪い！それより、そろそろ学校に行かないといけない時間なんじゃないの？」

理沙
「あ、ホントだ！じゃあ行って来るから！！」

そう言うと、理沙はカバンをひっつかんで走って行った。

タタタ・・・

理織
「は～い。ククク・・・」

理織は笑っている。

ハヤテ
「あ、おはようございますお兄さん・・・」

ハヤテは目をこすりながら目を覚ました。

理織
「やぁおはよう、ハヤテ君。」

ハヤテ
「あれ、理沙さんは？」

理織
「理沙なら、学校へ行ったよ。」

ハヤテ
「そうですか。ところで、何でお兄さん笑ってるんですか？」

理織
「秘密だよ、秘密。」

理織はまだ笑っていた。

白皇学院での授業を終えた理沙は、帰路に着いていた。

理沙
「全く、お兄ちゃんったら・・・」

理沙はブツブツ文句を言いながら歩く。

理沙
「ハヤテ君、か・・・帰ったら彼に告白しようかな・・・OKしてくれると良いけど・・・」
理沙は物思いにふけりながら歩いている。
そのせいか、彼女は背後から迫っている影に気づかなかった。
そして次の瞬間、理沙は影に羽交い締めにされた。
ガシッ！
理沙
「キャッ！？は、離して！！」
理沙がジタバタともがく。
影は無言のまま、彼女の口に布を当てた。
バッ！
理沙
「うっ！！」
理沙はしばらくもがいていたが、やがて目がトロンとしてきた。
理沙
「うぅ・・・（ね、眠い・・・）」
理沙はグッタリとなった。

「フフフ・・・」

影は不敵に笑うと、彼女を抱えて連れ去って行った。

ハヤテ

「遅いですね、理沙さん・・・」

ハヤテは夕食の準備をしながら、理沙が帰って来るのを待っていた。

理織

「そうだな。いつもならもう帰って来る時間なんだが・・・」

理織もハヤテを手伝いながら、顔をしかめている。

2人が理沙の心配をしていると、ハヤテの携帯電話が鳴った。

実はハヤテ、朝風家に住むようになってから理沙の父親に携帯電話を買ってもらったのだ。

ちなみにアドレス帳の1番には理沙の名前が登録してある。

ピリリ、ピリリ！

ハヤテ

「理沙さんからだ。はい、もしもし？」

理沙
「ハヤテ君、助けてぇ！！」
電話から聞こえてきたのは、理沙の叫び声だった。
ハヤテ
「り、理沙さん！何があったんですか？」
理沙
「1人で帰ってたら、突然後ろから襲われて・・・その後ここに連れて来られて・・・あ！」
「オマエか、朝風家が雇った男ってのは？」
理沙の声が遮られ、謎の男の声が聞こえてきた。
ハヤテ
「はい、そうです。あなたは何者ですか？」
「オレかぁ？オマエ達2人をずっと監視してたヤツらの親玉だよ。」
ハヤテ
「昨日ボク達をつけていた・・・目的は何なんですか？」
「朝風理沙はオレ達が預かってる。この娘を助けたければ、オマエ1人だけで北練馬市の明星神社まで来い。」
ハヤテ
「わかりました。その代わり、理沙さんには指1本触れないでくだ

さい。」

「ああ、約束しよう。」

ピッ！

電話が切れた。

ハヤテ

「お兄さん、ボクちょっと行って来ます！晩ゴハンの準備お願いします！！」

理織

「え？ちょっとハヤテ君！？」

ハヤテは言うが早いか、飛び出して行った。

理織

「一体何なんだ・・・？」

理織は首をかしげながら、夕食の準備を再開した。

北練馬市　明星神社

ハヤテは明星神社までやって来た。

ハヤテ
「来ましたよ！！」
ハヤテが叫ぶと、神社の扉が開いた。
数人の男達が近づいて来る。
その中に、両手を縛られ両脇を男に挟まれた理沙がいた。
ハヤテ
「理沙さん！！」
理沙
「ハ、ハヤテ君！！」
男は理沙を突き飛ばした。
ドンッ！
理沙
「キャッ！」
理沙はハヤテの元に駆け寄った。
ハヤテ
「大丈夫でしたか、理沙さん？」
ハヤテは理沙の両手の縄をほどく。
理沙

「うん、ありがとハヤテ君・・・」
理沙はハヤテに抱きついた。
ハヤテはそんな理沙を抱き締める。
「フフフ、感動の再会はそこまでだ。」
男がそう言うと同時に、仲間の1人が1匹のカエルを連れて来た。
男は小瓶を取り出し中身をカエルに飲ませる。
ゴクゴク！
すると、見る見る内にカエルが大きくなった。
ムクムクムクムク・・・
ハヤテ
「な、何だこのカエルは！？」
「コイツはオレ達が飼ってるヤツの1匹でな、呪術によく使っているのだよ。巫女や坊主の力を手に入れる術のな。」
ハヤテ
「な、何！？」
「我々の一族は代々昔から飼っている動物に坊主や巫女を食わせ、その動物の肉を食べる事で巫女や坊主の力を得ているのだよ。」

ハヤテ
「じゃあ、理沙さんを誘拐したのは・・・」
「朝風家の巫女の力を得るためだ。それにオマエ、綾崎の血を継ぐ少年だろ？」
ハヤテ
「ええ、確かにそうですよ。それが何か？」
「綾崎家の人間も代々不思議な能力を持っている。我々は綾崎家の力も狙っていたのさ。だが中々その機会に恵まれねぇ。オマエの両親が毎回後少しというところで逃亡してたからな。しかしオマエがあの両親から離れ、朝風家に仕え始めたのを風のウワサで聞いたのだよ。」
ハヤテ
「ボク達を監視していたのは、そのためだったんですね？」
「そういう事だな。さぁ、そろそろ覚悟してもらおうか。」
男達はハヤテと理沙に近づいた。
ハヤテ
「そうはいきませんよ。理沙さん、こっちです！」
グイッ！
ハヤテは理沙の手を握って駆け出した。
タタタ・・・

「ククク・・・我々から逃げられると思うなよ・・・」

リーダー格の男は、不敵な笑みを浮かべた。

ハヤテと理沙は、北練馬市内を走っていた。

ハヤテ
「理沙さん、大丈夫ですか？」

理沙
「ハヤテ君、私もうムリ・・・元々体力ないし、これ以上走れないよぉ・・・」

理沙は息があがっている。

ハヤテ
「仕方ないですね、こうなったら・・・」

ハヤテはそう言うと、彼女をヒョイと抱き上げた。

ヒョイッ！

理沙
「キャッ！」

ハヤテは理沙をお姫様抱っこしたまま走る。

ハヤテ
「これで良いですよね？」

理沙
「う、うん・・・ありがと・・・」

理沙は頬を赤くした。

しばらく走っていたハヤテの目に、森の入口が映った。

ハヤテ
「しめた！」

ハヤテは森の中に駆け込みしばらく走ると、木の上に飛び移った。

トンッ！

ハヤテ
「木の上なら遠くがよく見えますし、素速く逃げられます。さて、相手はどんな手で来るんでしょうねぇ？」

ハヤテがそう言っていると、何かの影が見えてきた。

ハヤテ
「あれは・・・さっきのオバケがエル？」

理沙
「ハ、ハヤテ君下を見て！！」

理沙が下を指差す。

ハヤテが下を見ると、カエルが長い舌を数本の木に巻きつけていた。

シュルシュルシュル！

カエルが舌を引き寄せると、ハヤテと理沙がいる木が折れ始めた。

ミシミシ！

理沙

「ハヤテ君！木がミシミシいってるよ！！」

ハヤテ

「このままではマズイですね。別の木に飛び移ります！」

ハヤテが理沙を抱えたまま別の木に飛び移ると、同時に彼らが乗っていた木が折れた。

ピョン！

ベキィ！！

ハヤテはその後も次々と攻撃を避けていく。

次第に木の数が減ってきた。

ハヤテ

「クソッ！ヤツらはこの森を丸裸にする気ですか！？」

理沙

「ハ、ハヤテ君・・・」

理沙は震えている。

ハヤテ

「大丈夫です。絶対に逃げ切ってみせます！」

ハヤテが微笑む。

すると、またカエルが舌を伸ばした。

シュルシュル！

木が数本折れ始める。

ミシミシ！

ハヤテ

「ハッ！」

ハヤテは木から飛んだ。

ババッ！

その時である。

カエルが舌をハヤテの足に巻きつけてきたのだ。

シュルルルル！

ハヤテ
「な！！」

理沙
「え！！」

カエルの舌はそのまま、ハヤテと理沙の体に絡みついた。

グルグルグルグル！！

ハヤテ
「う、うわっ！！」

理沙
「キャアアア！！」

ハヤテと理沙を捕まえたカエルは、彼らを縛っている舌を引き寄せる。

グイッ！

ハヤテ
「クッ！！」

理沙
「キャア！！」

カエルはもがく2人を飲み込んだ。

パクン！！

ハヤテと理沙を丸飲みしたカエルは、ペロリと舌を出した。

ペロリン！

理沙
「このぉ！出して、出してよぉ！！」

カエルに飲み込まれた理沙は、お腹の中で暴れていた。

ハヤテ
「落ち着いてください理沙さん！そんな事したってビクともしませんよ！！」

そんな理沙をハヤテがなだめる。

理沙
「そ、それはそうだけど・・・」

理沙はおとなしくなった。

ハヤテ
「とりあえず、何とかしてここから脱出する方法を考えないと・・・」

ハヤテがそこまで言った時、何やら怪しげな音がした。

ピチャ！

理沙
「な、何だこの音！？」

ハヤテ
「マズイ・・・これは胃液です！！」

理沙
「えええええ！？」

そう叫ぶ理沙のクツに、胃液が少し落ちた。

ピチャ！

ジュッ！！

理沙
「キャアアア！！」

ハヤテ
「理沙さん！大丈夫ですか！？」

理沙
「う、うん・・・クツが少し溶けたみたい・・・」

そう言う間にも、少しずつ胃液の量は増えていく。

ハヤテ
「ヤバイ・・・このままじゃボク達溶かされます！！」

理沙
「そ、そんな・・・」
理沙はガタガタと震える。
理沙
「イ、イヤだ・・・」
理沙はハヤテに抱きついた。
ハヤテ
「理沙さん!?」
理沙
「私、まだ死にたくないよぉ!まだハヤテ君に気持ち伝えてないのにぃ!!」
理沙は泣きそうになっている。
ハヤテ
「理沙さん・・・」
ハヤテはそんな理沙を抱き締めた。
ダキッ!
理沙
「ハ、ハヤテ君!?」
ハヤテ

「大丈夫です、理沙さん。絶対にボクがあなたを助けますから。」

ハヤテの言葉に、理沙は顔が赤くなる。

ハヤテ
「理沙さん、しっかりつかまっててくださいね？」

理沙
「う、うん！」

理沙はしっかりハヤテに抱きつく。

ハヤテ
「疾風怒濤・・・疾風の如く！！！」

ハヤテは強大な波動を放ちながら、前に突っ込む。

ドンッ！！

ハヤテはカエルの腹を突き破った。

ドギャ！！

「な、何ぃ！？」

男達はハヤテと理沙が脱出してきた事に驚く。

ハヤテは理沙を抱っこしたまま、地面に着地した。

トンッ！

ハヤテ
「ケガはないですか、理沙さん？」

理沙
「う、うん・・・」

理沙は頬を染める。

ハヤテ
「さぁて・・・お仕置きの時間ですよ。」

ハヤテはそう言うと、疾風の如くで男達をあっという間に全員なぎ倒した。

その後男達はハヤテと理沙が呼んだ警察に連行され、２人は簡単な事情聴取を受けてから朝風家に帰って行った。

ハヤテと理沙は、朝風家へと戻って来た。

理織
「おお、理沙！無事だったか！！」

扉を開けると、理織が２人を出迎えた。

理沙

「ハヤテ君に助けてもらったんだ。」

理織

「そうだったか。ありがとう、ハヤテ君。妹を助けてくれて。」

ハヤテ

「いえいえ。」

理沙

「それより夕食にしようよ。お腹が空いちゃって。」

ハヤテ

「そうですね、夕食にしましょうか。」

ハヤテ達3人はリビングに向かう。

その後リビングで待っていた理沙の家族と共に、夕食を食べ始めた。

ハヤテ

「フゥ・・・」

ハヤテが部屋で本を読んでいると、ドアを叩く音がした。

コン、コン！

ハヤテ

「はい、どなたですか？」

理沙
「私だよ、理沙。入って良い？」

ハヤテ
「理沙さんですね。」

ハヤテはドアを開けた。

ガチャ！

理沙が部屋に入って来る。

理沙はベッドの上に座った。

理沙
「ハヤテ君ありがとう、私を助けに来てくれて。」

ハヤテ
「いえいえ、あなたはボクにとって命の恩人ですから。」

ハヤテは微笑む。

理沙はその笑顔に赤面した。

ハヤテ
「ところで、カエルのお腹の中にいた時理沙さん何か言いましたよね？」

理沙
「う、うん。」

ハヤテ
「『まだハヤテ君に気持ちを伝えてない』でしたよね？それってどういう・・・」

理沙
「ハヤテ君、私の隣に来て。」

ハヤテ
「はい。」

ハヤテは理沙の隣に座った。

理沙
「私、ハヤテ君と一緒に暮らすようになってから少しずつ君に惹かれていたんだ。何でもできるし、カッコ良いし・・・お兄ちゃんに今日の朝ハヤテ君と一緒に寝ていた事を冷やかされた時、スゴく胸が高鳴ったの。その時気づいた、これはきっと恋なんだって。だから君に気持ちを伝えようと思ったんだ。」

ハヤテ
「・・・」

理沙
「誘拐された私をハヤテ君が助けに来てくれた時、とても嬉しかった。あの時ずっと私ドキドキしてたんだよ。その後君に守られ、とてもとても胸が高鳴って・・・ハヤテ君、私は君の事を・・・」

理沙がそこまで言った時、ハヤテが理沙を抱き締めた。

ダキッ！

そして、彼女に熱いキスをする。

理沙
「ハ、ハヤテ君・・・」

ハヤテ
「その先は言わなくて良いです。ボクも同じ気持ちですから・・・」

ハヤテの言葉に、理沙は頬を真っ赤にした。

理沙
「じゃ、じゃあハヤテ君・・・」

ハヤテ
「はい。ボクもあなたの事が好きです、理沙さん。ボクとつき合ってくれますか？」

理沙
「うぅ・・・ハヤテ君～っ！！」

理沙はハヤテに抱きつくと、泣き出した。

理沙
「ありがと、ハヤテ君・・・私なんかで良いの・・・？」

ハヤテ

「あなただから良いんですよ。２人で幸せになりましょう♪」

理沙
「はい・・・喜んで・・・♪」

ハヤテと理沙は再び抱き合い、キスを交わす。

理織
「（良かったな、理沙・・・）」

ハヤテの部屋の前で聞き耳を立てていた理織は、微笑みながらその場を立ち去った。

それから3年後、ハヤテと理沙はめでたく結婚した。

彼女の家族に祝福されて。

クリスマスの日、神社で出会ったハヤテと理沙。

２人の出会いは運命だったのだ。

いずれ惹かれ合い、結ばれるという。

この男女なら、幸せな日々を歩んでいける。

そう、きっと・・・

綾崎ハヤテと朝風理沙。

２人の未来に、幸あれ♪

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8775e/

巫女さんと少年の出会い

2010年10月10日03時00分発行